

白金校舎ボランティアセンター報告

① コーディネーター報告

2008年度も終わりに近づきつつある2009年1月20日、アメリカで初の黒人大統領が誕生した。第44代大統領となった、バラク・オバマ氏の就任演説では、心震えるフレーズにいくつも出会った。その中の、「On this day, we gather because we have chosen hope over fear, unity of purpose over conflict and discord. (この日に我々が集ったのは、恐れではなく、希望を選んだためで、争いの代わりに団結を選んだからだ)」というフレーズは、まさに今年度、学生たちと共に共有してきた価値観そのものであった。

私が白金ボランティアセンターの現場運営担当者であるコーディネーターとして、今年度の白金ボランティアセンターの活動において目指した目標は二つある。一つは心理学部と国際学部を「出会わせる」ことである。本学は白金校舎と横浜校舎の2校地を有するが、心理学部のみ4年間白金校舎で学び、国際学部のみ4年間横浜校舎で学ぶ。その他の学部は主に1、2年次を横浜校舎で、3、4年次を白金校舎で学ぶ。着任以来2年間、学生たちを観察した結果、心理学部は白金にアイデンティティを、国際学部は横浜にアイデンティティを持つ学生が多く（どちらかといえば国際学部のほうがその傾向を強く感じる）、その他の学部生には「校地」という観点からの強いアイデンティティへのこだわりはそれほど見受けられなかったように感じた。校地へのこだわりを「場所を語る」ことだと考えると、「場所を語る」ことによって自己のアイデンティティを語っているようにも理解できるのではないだろうかと考えた。このように自分の言葉を紡ぐことができる学生には、「力」があり「おもろい」学生が多いのではないだろうか。このような仮説のもと、今年度はぜひ、そのような学生が在籍する確率が高いと考えられる、心理学部と国際学部の「出会いの場」を創出してみたいと考えた。それが、白金ボランティアセンターが本当に意欲のある学生たちにとって、利用価値のある魅力的な場所となり、全学的な活性化のきっかけになることを期待した。そしてこのようなプロセスの最後、年度末の頃にはたくさんの「おもろい」学生たちとその周辺の人々の「出会い」が出来ているのではないかと想定して、その人々をネットワーキングする機会を創りたいと考え、それを二つ目の目標にした。

このようなビジョンを夢見て始まった今年度は、2007年度も終わろうとしている3月末の白金志田町倶楽部（以下、志田町倶楽部）との出会いが大きな転機となった。この団体については白金志田町倶楽部ホームページ (<http://www.ifaps.org/kai.html>) と本書「学生スタッフ」、「ボランティアファンド学生チャレンジ賞」のページを参照していただきたいのだが、白金という街が抱える様々な課題をなんとかしようと立ち上がった地域の方々の団体である。私はこの団体の、「新旧住民、もしくは住民であるかないかを問わず、白金の街が好きで、目指すもの、価値観が同じなら皆仲間である」「時間よりスピード」という明確なポリシーに深く共感した。何より、このポリシーを実証していく格好良さと行動力の素晴らしさに感激した。そうして今年度がはじまったばかりの4月6日に学生有志3名を伴い、志田町倶楽部

の懇親会に参加したことをきっかけに、は5月25日に開催された「シロカネストリートフェスタ」での協働が始まった。これは、白金ボランティアセンターに非常に大きな影響を与えた。学生の事例は本書「学生スタッフ」のページ、「ボラチャレ受賞団体」のページ、「アメリカ NPO ボランティア体験学習プログラム」のページを参照していただきたいが、このフェスタでの協働を通じて、様々な可能性を知ることができた。まずは事務局が白金校舎から徒歩10分という好立地であることから、学生たちが大学にいる時間の空き時間を利用して活動に参加することが可能だった。それが持続可能な活動の地盤となり、事前の準備から当日までの活動に関わることができた。おかげで白金の街と人の魅力を十分に知ることができ、フェスタ当日だけの単発参加では創れない、地域の方々と一体感と信頼関係を構築することができた。また、学生4名が運営委員となって学生チームが発足したのだが、この4人のメンバーの内訳は心理学部2年生と3年生、国際学部2年生、法学部4年生であった。こうして早々に「心理学部×国際学部」という競演を実現でき、学生レベルの全学的な協働と、国際学部の学生にも白金での活動ができる、という新しい発想の選択肢を提示することができた。また、学生チームの発足に伴い、志田町倶楽部とボランティアセンター間において、7月28日、「白金志田町倶楽部明治学院大学学生チームの地域社会貢献活動支援における白金志田町倶楽部・明治学院大学ボランティアセンターの協力と連携に関する覚書」を取り交わし、締結式には、学生チーム運営委員、志田町倶楽部の皆さん、本学ボランティアセンター及び地域連携推進室のスタッフらが同席し、それぞれの立場を語り、情報を共有しあえたことで、三者（学生・地域・大学）協働の可能性を生み出すきっかけとなり、白金ボランティアセンターにおける三者協働プロジェクトの発展につながった。

このように、フィールドは校地ではなく場所であるという、当たり前だが新しい発想を全学の学生に向けて提示することができ、本学の学生が白金という地域で活動できる様々な可能性、そして何よりも白金という場所に校舎を有する明治学院大学の学生だけが享受できるメリットを実感してもらえたことで、活動の活性化と同時に、地域の社会貢献活動を通して明学生としての誇りが育つきっかけにもなった。また、このようなたくさんの経験と教訓を約1ヶ月半という短い期間で得られたことが、たった4年間しか明治学院大学の学生でいることができない学生たちと、彼らを支援する白金ボランティアセンターにとって、大きな自信と財産、そして協働する上での「方法」と「時間の感覚」に対する共通した価値観の共有につながった。

その直前である、7月13日に開催した「外部団体によるボランティア説明会」に参加した、NPO 法人ボルネオ保全トラストジャパンとの出会いから、三者協働プロジェクト「パールビーズの森プロジェクト」が発足する（詳細は29ページを参照）。このプロジェクトは、アブラヤシのプランテーション開発のために行われているボルネオの森林伐採という問題に対して、伐採をやめればパームオイルが生活必需品である私たちの生活と、収入源になっている現地の人々の生活が困窮するという「開発」に対する問題と、「開発」によって棲家を追われた動物たちを守るという「保全」という、同時に「解決」する

ことが難しい問題に向き合いながら、今できることを実行していこう、という主旨で展開している。具体的には、ボルネオで採れる淡水パールを活用してパールアクセサリーを開発、製造し、それを販売して得た収益金でボルネオの森を買い、自分たちが享受したパームオイル分のプランテーションの土地を野生動物たちにプレゼントという形で返していこうというものである。学生たちが、「結果を出さなければ本当の支援にはつながらないボランティア活動」という厳しさにも向き合い、活動を通して経済サイクルの中における社会貢献の形を考える発想力を持ち合わせる機会として期待している（プロジェクトの詳細は29ページ参照）。

そのほか、今年度の白金ボランティアセンターは、本当にたくさんの地域の方々との交わりの中で運営した年となった。前述では、今年度から新しい関係が生まれた団体を詳述したが、前年度から続くお付き合いをさせていただいた団体との関係があったからこそ、今年度のような発展にステップアップすることができたと考えている。

前年度から「地域連携プロジェクト」として協働してきた福祉プラザさくら川とは、今年度の初めに参加学生たちが1名を除いてドロップアウトする事態になった。この件を通じて、さくら川には多大なる迷惑をかけることになったのだが、それでも本学に対する期待と信頼を持ち続けてくださったことにより、活動は継続し、最近になってようやく小さな芽吹きが始まった（詳細は30ページ参照）。新年度から困難な状況になったが、前年度までの反省と教訓として、学生が主体的に関わる形、それに対するボランティアセンター側の支援体制と教育、指導、さくら川の体制や考え、学生ボランティアやボランティアセンターに期待するものといった、三者それぞれの価値観と領域、責任について、率直に何度も何度も議論を重ねた。福祉の現場を通じて、改めて人とのコミュニケーションや本当の連携と協働の形とは何なのか、試行錯誤しながら創り上げる困難と充実感を学ばせていただいた。

そのほか、2年近いお付き合いになる林試の森クリニックには、継続的に心理学科の学生たちがお世話になっている。病院という特殊な環境で臨床の現場を目の当たりにしながら学生がボランティアという立場で経験を積む機会を頂戴することはなかなか難しいが、院長先生を始め、スタッフの皆様の暖かいご指導のもと、お世話になっている学生たちは充実感一杯に活動させていただいている。

また、白金校舎近隣にあるスリランカ大使館には、毎年渋谷の代々木公園で主催する「スリランカフェスティバル」への当日ボランティア募集の協力を行っており、このボランティア参加を通して、学生たちが気軽に地域社会や多文化共生社会に参加できる機会を頂戴している。今年で3回目の協力となるが、約50人の本学の学生たちが参加させていただき、年々その参加者数は増えている。フェスティバル後の大使館主催のボランティア感謝パーティも楽しい交流の機会として学生たちはとても楽しみにしている。

その他、昨年度から年間を通してお付き合いをさせていただいている港区青少年対策高松地区委員会にも、非常にお世話になった。4月にはこの団体が主催し、今年で24回目の開催という四半世紀も続く

「ふれあい運動会」に本学の学生が初めて参加させていただいた。この運動会は白金校舎に隣接する白金小学校で行われるもので、約 300 人あまりの近隣地域の方々が参加する。学生スタッフを中心に、4 名がふれあい運動会実行委員会の運営会議から参加させていただき、当日は約 15 名の本学の学生たちが競技のデモや設営、片付けを中心に参加させていただいた。運営委員会は白金小学校で行われたため、学生たちは無理なく参加することができた。地域の方々は「近くて遠いと思っていた明治学院大学の学生さんたちと交われて本当に嬉しい。いてくれるだけで嬉しい。」と手放しで喜んでくださった。運動会後は小学校の図書館で地域の方々が腕を振るった手料理を皆で囲み、楽しい交流会となった。それに続き、8 月は同団体が主催する白金地域の子どもたち 80 名ほどを引率するサマーキャンプボランティアにも学生団体 SUCCEED (57 ページ参照) の学生を中心に 10 名ほど参加させていただいた。また、このような本学からの参加だけではなく、団体の方々も白金校舎でボランティアセンターが主催する各種体験学習プログラムの報告会に足を運んでくださったり、ボランティアセンター活動推進委員会の委員としてもご参加いただいたり、相互関係が構築されている。今後は白金地域の子どもたちと出かけるいちご狩りが 2 月に、白金地域の子どもから高齢者まで出演する、「ふれあいコンサート」が 3 月にあり、それぞれ学生たちが参加させていただく予定である。

このように学生たちが積極的に地域に多く出て行くことで、地域の中でも学生とボランティアセンターに対する認知と理解が広まった。12 月に開催したジャングルクリスマスフェスタ in 白金 (29 ページ参照) では、学生が直前に突然相談に伺ったにも関わらず、白金小学校で快く広報協力をしてくださった。おかげで、当日はたくさんの子どもたちと地域の方々が訪れてくださり、イベントの成功につながった。日常的にも、白金校舎近隣で「顔見知り」の地域の方々が増え、白金の街を歩いていて「挨拶」が飛び交うようになった。これは、まず学生たちとボランティアセンターが地域にでかけていったことで、地域の方々が受け入れてくださり、その上で地域の方々が私たちに門戸を開いてくださったのだと考える。そうした過程で、地域への「愛着」と「誇り」という形が学生、そして私の中にも芽生えていき、地域の方々からも明治学院大学へ愛情をいただけるようになっていったのだろう。

学内においても新たな輪が広がったことも、今年度の大きな特徴である。学生への広がりとしては、公認団体のボランティア活動への直接参加例として、カポエイラのジャングルクリスマスフェスタ in 白金 (詳細は 29 ページ参照) への出演や、JAZZ 研究会の白金志田町倶楽部白金ジャズ化プロジェクトへの参加、本学の卒業生がスタッフで活躍していらっしゃる NPO 法人 Club Tom と、日本シッティングバレーボール協会、日本ろうあバレーボール協会が企画した「デフ × シ ッ テ ィ ン グ × Club Tom バレーボールフェスティバル」への手話サークルぼっけによる手話通訳ボランティア参加などがあった。間接的な参加例としては、学生スタッフ主催ベンチャーサークル合同説明会 (詳細は 25 ページ参照) に参加した未公認団体 (COS、こどぶき学童ボランティアじゅんたま、学生団体 SUCCEED、MG☆SUZU、NPO 法人 birth、世田谷 BBS 会) があった。

また、学生のみならず、教職員にまで輪が広がったことも大きな収穫であった。教員が、コーディネーター（以下、筆者）を積極的に授業に呼んでくれることで、白金ボランティアセンターの活性化のために協力してくれた。社会福祉学科茨木尚子先生の「社会福祉運営論 A（白金校舎開講）」では、さくら川のスタッフとともに地域連携プロジェクト、MG☆SUZU（30 ページ参照）について紹介させてもらい、MG☆SUZU の新メンバー獲得につながった。また、教養教育センター猪瀬浩平先生担当の「ボランティア学2（白金校舎開講）」では、白金の街をテーマにした2回連続という形の講義を設定してもらい、第1回目の授業では志田町倶楽部が白金の街を語り、第2回目の授業では筆者と白金学生スタッフチームとの「共演」で「白金と明学を結ぶ、種をまく」というテーマで話し、授業という形において「地域×学生×教員×職員」という協働を生み出すことができた。また、筆者と国際学部所属の白金学生スタッフとの「共演」で、「ボランティア学3（横浜校舎開講）」でも「ボランティアがうまれるとき」というテーマで横浜校舎に在籍する1年生に向けて話すことができた。そのおかげで、横浜校舎に在籍している学生もわざわざ白金ボランティアセンターを訪れたり、白金での地域活動に参加するようになった。また、猪瀬先生には学生スタッフミーティングにも参加していただき、様々な助言を頂戴した。このように、専門家の方々に関わってもらえたことで、活動に幅と深みが出た。そして、講座や授業を持たない、学生との窓口が無い環境であるにも関わらず、学生たちとの協働を目指すという、今のボランティアセンターが抱える構造的な問題をフォローしてもらえた。協働と依存の違いをしっかりと認識し、今後も教員との協働を進めながら、ボランティアセンター自体が抱える課題について解決に向けて同時に動くことが重要である。

職員に関しては、前述した地域推進連携室以外に、広報課とのつながりが広がった。「結果」としてのニュースではなく、プロセスを追って記事にしていきたい、という相談に快く応じてもらい、現在、MG☆SUZU を追跡取材してもらっている。今後、広報課が発行する大学広報紙「白金通信」に取り上げられる予定である。職員との交流を通して最も印象深かった点は、学生のために何かしたいという気持ちはあるものの、事務部署という範疇でどのように具体的に支援できるのか、というジレンマを抱えているということだった。以上から、教育機能、事務機能もあり、学生との距離が非常に近いという、他部署にはない特殊性を持ったボランティアセンターだからこそ、学生だけではなく、教職員も含めた学内連携の構築において他部署では担うことのできない役割を果たせるのではないかと考える。

最後に、今年度は本学の卒業生の方々との輪も広がった。横浜校舎の学食にパンを下ろしている社会福祉法人共働舎の施設長は本学社会福祉学科の卒業生であるが、障害者の自立支援として20年近くも前から授産施設の運営に尽力されてこられた、パイオニアである。この方を学生団体 SUCCEED が MG style（詳細は 31 ページ参照）で取り上げ、学生たちが直接インタビューさせていただいたことで、学生たちは本学の魅力と卒業生という人的財産について再認識するきっかけになった。そうした実感が、その後、学生団体 SUCCEED 主催のイベントのコンセプトとして実際に現れている（詳細は 31 ページ

参照)。その他、11月13日には「外部団体によるボランティア説明会」としてフェアトレードショップの草分け的存在である第三世界ショップにお越しいただいたが、本学を3年前に卒業されたスタッフの方が来校して下さったおかげで、インターン時代の話、就職と社会貢献活動、自身の経歴など等身大で学生に向けて語ってくださり、学生たちに非常に好評だった。そしてその後、横浜校舎でも話をしてくださることになり、多くの在校生たちが話を聞くことができ、自分の人生観、職業観について身近で具体的な例から考える機会となった。更に、後輩たちの活動の活性化に少しでも協力できれば、ということで、ジャングルクリスマスフェスタ in 白金（詳細は29ページ参照）に出店して下さり、後輩のイベント成功のためにご協力くださった。

以上のように、白金ボランティアセンターは前年度までに比べ、劇的な変化を遂げることができた。何よりも目に見えて分かりやすい変化は、来室学生の増加である。学生スタッフらは空き時間を縫ってはやって来て、その場で打ち合わせ、コーディネートや学生対応、作業などを行う。学生スタッフ以外にも体験学習プログラムの学生たちなども頻繁に訪れる。そしてボランティアセンターで発信する利用価値が増えたことでその他の学生たちも自然に集まるようになった。そして必ず、初対面の学生同士は自己紹介をするのが約束事となっている。したがって、ボランティアセンターに来なかったら絶対に友達にはならなかっただろう、という「キャラクター違いの友人の輪」が広がっているのも特徴の一つである。また、今年度から頻繁に訪れるようになった学生が、たまたま学生が誰もいないセンターを訪れた際、「学生誰もいないのですか？珍しいですね！」という言葉を目にしたときは、確実に変わったことを実感した。このような量的な変化だけではなく、質的な変化の実感もあった。授業や学生スタッフが発行しているフリーペーパー、口コミなどで白金ボランティアセンターの活動を知ってから来室してくれた学生たちは皆一様に驚く。「こんな暗くて狭かったんですか！でもやってることは大きいんですね！カッコいいです！」確かに、白金ボランティアセンターは窓もなく、本館の地下のような雰囲気の1階にある。広さも前面ガラス張りですら広々とした横浜ボランティアセンターに比べても、半分以下の広さだ。学生スペースに学生が5人もいれば、圧迫感で一杯だ。しかし、訪問した学生たちが言ってくれたこの言葉は、私も含め学生スタッフたちにとって、何よりも嬉しく、誇らしかった。白金学生スタッフチーフ報告にもあるが、私たちは「限られたヒト・モノ・カネ・ジカンの中でどこまでベストを出せるか」という考えを共有しながら、協働してきた。人員、資源、お金、時間はあるにこしたことはないが、結果を出すための直接的な要因とは断言できないだろう、という現実を自覚するところから自ずと自分自身と環境とのライフワークバランスが見えてくるし、結果的にベストが出せるのではないか。その挑戦と実証の実践が今年度の活動だった。

紙面の関係から紹介しきれなかった方々も多いが、このように今年度は地域、学内（学生、教職員）、OB・OGの皆様による、大きな輪が広がったことは、白金ボランティアセンターにおける最大の成果であり、次年度への礎となった。そして、このような成長を遂げるに至った一番の立役者として活躍した

のは、白金学生スタッフであった。

彼らに対して特筆すべきことは、実践活動と、学生と学生、学生と地域をつなぐ架け橋としてのコーディネーター的機能と役割を、形にとらわれることなくしなやかに創りだしたことだろう。既存の学生スタッフの形において一番の課題であったのが、実体を創造する前に形を作ったことによって、「実体」を創造したかのような錯覚を持つパラダイムに陥り、その規範の中から動き出すことができなかつたことである。2年間の試行錯誤と努力によって、今年度はようやくその壁を打破することができ、本学の学生の持つ力と魅力を伸び伸びと発揮することができたことは、大きな成果であった。彼らの今年度の実績はボランティアセンターホームページにて発信している。そしてそれは、それまで情報の更新が滞っていたボランティアセンターホームページにも動きが出るきっかけとなった。今回、報告書を通して彼らと協働できたことを非常に嬉しく思うとともに、仲間として、彼らを心から誇りに思う。

現時点で、白金学生スタッフは主にプロジェクト制のスタイルで活動を展開しているが、それは今現在のボランティアセンターの環境と状況、学生の人数と状況の中におけるベストであると考えている。補足するなら、プロジェクト化を目指して活動してきたのではなく、学生の想いの実現と夢を語れる場所づくり、そして社会課題に取り組むという意味でのボランティア活動の構築を目指した結果が三者協働スタイルであり、プロジェクトスタイルだったということである。その過程で学んだことは非常に多い。まずは白金校舎近隣には、豊富な地域資源が存在するということである。地域資源とは、想いを行動に移せる人々がたくさんいる地域ではないかと考えている。そしてもう一つは豊富な学生資源との出会いである。本学には愛校心をもった、向上心旺盛な学生が多い。そして、プロジェクトのプロセスそのものが、このような有能な学生の総合的な社会力を育てる実践の場となっていることである。当然ながら、今後、地域社会の抱える課題も、学生の様子も、プロジェクトの形も変化していくだろう。しかし、変化とは成長であり発展であると考えている。これからも変化を柔軟に楽しみながら、白金ボランティアセンターの価値を創造していきたい。

最後に、現在私は業務として、2つの体験学習プログラム（9ページ・13ページ参照）と、白金ボランティアセンターの現場運営を担当しているが、現場の立場から、育成という観点の教育と協働という両輪を武器として展開していくことが、ボランティアセンターの発展を大きく左右すると考える。今年度の経験から、大学ボランティアセンターは希望の組織化を図る役割を担った場所であると考えている。その機能をいかんなく発揮するためには、構造的な問題解決のための組織的な取り組みが必須である。そして実際に、今年度、本学執行部が委員会をたちあげ、その検討を始めた。今後の展開がおおいに楽しみである。

世界的な経済危機に見舞われ、実体経済という言葉が頻りに耳にする昨今だが、ボランティアの領域においても、同様のロジックを当てはめることができるだろう。そういう意味では、実体豊かな地域資源に恵まれた白金ボランティアセンターは本当に幸運だと思う。そして実体を創造し、自分の言葉で自

己のアイデンティティを語れる学生が着実に集まり、育っている。そして今年度も終わろうとしている今、今年度の初めに掲げた第二の目標の実現が現実味を帯びてきている。2月19日に秋学期（後期）白金学生スタッフ研修会を開催するが、そこで今年度培った学生、地域、教職員を「つなぐ」イベントを3月に企画する予定である。そして、このイベントが今年度、共に走ってくれた卒業していく4年生たちへのはなむけにしたいと考えている。補足するなら、このイベントは、彼らへの人脈という形のギフトであると考えている。それは在校生たち、そして来年度入学する新入生たちにとっても大きな財産となるだろう。

私はこのように、夢と希望を学生とともに語り、議論し、形にできる立場で本学にいることを、この上ない幸せと喜びとして感謝している。そして今年度が終わる3月まで、そして新年度からも学生、教職員、地域の方々と共に進化を続けていきたいと考えている。本来、大学という場所は、夢と希望を語り、議論をする場所だと考える。希望を組織化する役割を果たすべく、来年度はボランティアセンターを「夢を語り、学生の可能性を引き出せる場所」としてより明確な形にしていきたい。

ミシェルアメリカ新大統領夫人が就任式で身に着けたスーツは、「希望」と「再生」を表す、黄色だった。黄色は、本学のスクールカラーである。波乱に満ちた門出であるが、「Yes, we can」と力強く訴えるオバマ大統領とミシェル夫人のように、私たちも「希望」と「再生」の加護のもと、白金の地で「Yes, we can」と力強く続けたい。

(李)